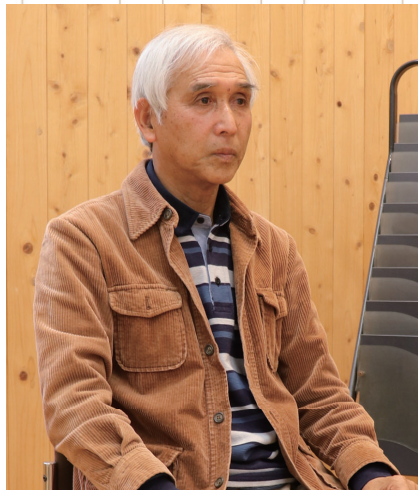


名物館長が語る勇の魅力



吉井勇記念館元館長
山中幸三郎 さん

長年に渡り、吉井勇記念館の館長を務めてこられ、残念ながら昨年度末に退職された、名物館長の山中幸三郎さんにお話を伺いました。まだまだお元気で、取材時間いっぱい吉井勇についてお話をうかがえました。



吉井勇縁の人物達

森鷗外

本名森林太郎。1862年に代々津和野藩の典医を務める森家の長男として生まれます。ドイツへの留学などを経て、帰国後、軍医を務めながら文学活動に励みます。代表作に『舞姫』、『平夕・セクスアリス』などがあります。勇がまだあまり有名ではない頃に、平野万里や石川啄木らと文芸雑誌『スバル』を創刊します。この雑誌の監修をしていたのが森鷗外でした。勇の作品には、森鷗外が登場するものがあり、そこでは森鷗外のことを先生と呼び、慕い尊敬していたことがうかがえます。

石川啄木

岩手県に生まれ、小学校から秀才ぶりを発揮し、神童と呼ばれます。しかし、中学に進級してからは、金田一京助から文学の面白さを学び、文学に夢中になり、落第し、自主退学をします。その後、上京しますが、貧困のため帰郷します。それでも文学を諦めきれず、再び上京し、吉井勇らと出会い、親交を深めます。文芸雑誌『スバル』では、交代で紙面の編集にあたり、少くも周囲から才能を認められていく啄木ですが、26歳で結核のため死去。勇は晩年に『長生きするのも芸のうち』という言葉を残すのですが、才ある若者の死を傍で感じたからこそその言葉であったのではないのでしょうか。

伊野部恒吉

土佐の人、銘酒『瀧風』の醸造家の主で、勇の良き理解者でした。文学を好み、気に入つた者に自身の財を使うことに悔いはないというよな人物であり、満身創痍の状態でも土佐にたどり着いた勇を援助し、溪鬼荘を世話します。恒吉がいなければ、勇が猪野々で隠棲することはなかったでしょう。勇はこの時の恩を生涯忘れず、恒吉の訃報が届いた際には、すぐに海路で土佐に来て葬儀に駆け付けています。友いまだ生きてかあらむこちして

土佐路悉しくわれは来にけり

谷崎潤一郎

東京生まれの小説家、代表作に『細雪』などがあります。谷崎家に長男として生まれ、東京府立第一中学校に入学。勇の同級生となりますが、この頃はあまり親しい間柄ではなかったようです。谷崎は飛び級するなど秀才ぶりを発揮しながら、高校、大学へと進みます。しかし、大学で谷崎は自らエリート街道を捨て、成功するかどうか分からない作家の道を選びます。そして、勇達と出会い親交を深めていきます。祇園の勇の歌碑建立の発起人の一人として名前がありますので、とても親しい間柄であったことがうかがえます。

吉井友實

勇の祖父であり、薩摩藩士として西郷隆盛や坂本龍馬らとも面識があった人物です。勇の歌人としての資質に大きな影響を与えた人物でもあります。維新後、友實はその活躍から伯爵位を授けられ、広大な屋敷を手に入れます。その屋敷では、頻りに芸人や芸者などを招き、遊芸を楽しんでいました。そうした環境で幼少期を送った勇が祇園で遊び、芸人たちとつながり、『祇園歌人』と呼ばれたのは想像に難くないでしょう。

柳原徳子

吉井勇の最初の妻であり、後に離婚します。由緒ある伯爵家の柳原家と維新後に伯爵家となつた吉井家では元々釣り合った結婚ではなく、年齢も14ほど離れていました。さらに、蝶よ花よと育つた徳子は家事等はできず、勇の思つていた結婚生活ではありませんでした。そんな中、『不良華族事件』が明るみになり、勇も世間から白い目で見られ、別居そして離婚へとつながります。徳子のみが悪いように思えますが、実際は結婚して直ぐに勇は家を離れており、時代柄ではありますが、勇にも責任の一端はあつたのではないのでしょうか。

吉井勇との出会い

室戸市出身の山中幸三郎さんが吉井勇について詳しく知るようになるのは、香北中学校の校長を務めていた時のことです。当初、吉井勇の名前こそ知っていたが、経歴や作品はあまり知りませんでした。しかし、香北中学校で勤務し地域と係わるうちに、猪野々を知り吉井勇について興味を持つようになりました。そして、退職後に吉井勇記念館長の職にとオファーがあり引き受けました。

吉井勇の魅力

吉井勇といえば、『ゴンドラの唄』や『酒ほがひ』などの若い頃の作品が目玉を浴びることが多いのですが、猪野々の隠棲以降の『人間経』『天彦』といった歌集と比較しながら読んでみると、別な勇の姿が見えます。勇は伯爵家に生まれ、何不自由ない生活を送るのですが、父親の負債や妻の『不良華族事件』などで満

身創痍の状態でも土佐に隠棲します。

溪鬼荘と吉井勇

勇が隠棲を始めたころの作品には、この世に私の居場所はないというような、苦しみや恨みの気持ちが表れています。しかし、そんな勇の心を猪野々地区の人々と自然が癒していきます。血のつながりが無くとも隣人と家族のように付き合い、共に酒を呑む、都会とはまた違った人付き合いに勇は驚き、たいそう気に入ります。そうして、勇が猪野々地区の人々の温かさに触れ、気持ちに変化が生まれていきます。その心の移ろいが歌集や随筆等に記されています。勇自らが選んだ『寂しければ御在所山の山櫻咲く日もいとど待たれぬるかな』の歌碑が記念館に立っています。寂しさの中に桜咲く(再婚を暗示)と歌う。苦境から安らぎや優しさを取り戻す勇の姿が浮かびます。

全国で唯一の吉井勇記念館

吉井勇の記念館は全国で唯一この香美市だけです。勇は、坂本龍馬・やなせたかしと同様に全国へ発信できる人物です。猪野々は勇の生き方に大きな影響を与えた地です。ぜひ香美市の皆さんには勇のことを知っていただき、記念館を中心に吉井勇をどんどん盛り上げていってもらえればと願っています。そうしていくことで、香美市の宣伝にもつながるはずです。